ALPS INTERVIEW

気象キャスター

# 蓬莱 大介さん

## 「人生の作戦ノート」で見つけた進むべき道

DAISUKE HOURAI

【ほうらい・だいすけ】1982年兵庫県出身。早稲田大学政治経済学部在学中、TOKYO MX『5時に夢中！』の「夢中ボーイズ」としてデビュー。大学卒業後、俳優の道を志すも25歳で断念。方向転換して気象キャスターを目指し、27歳で気象予報士試験に合格。気象会社でのアルバイトや気象キャスターのサポート業務で経験を積んだ後、29歳で気象キャスターに。現在、読売テレビの『情報ライブ ミヤネ屋』『ウェークアップ』に出演中。著書に『空がおしえてくれること』（幻冬舎）、『そらのどうぶつえん』（コミニケ出版）等がある。

INTRODUCTION

私たちの生活に欠かせない天気予報。毎日、決まった番組でチェックしている人も多いだろう。読売テレビ『情報ライブ ミヤネ屋』や『ウェークアップ』で気象キャスターを務める蓬莱大介さんは、〝お天気お兄さん〟の先駆けとして2011年にデビューした。さわやかなルックスとわかりやすい説明で、いまやお馴染みの顔である。だが、そこに至るまでの道は平坦ではなかったという。どのように道を切り拓いてきたのか、蓬莱さんに話を伺った。

## やみくもに夢を追いかけるんじゃなくて、作戦が必要だ

**——現在、気象キャスターとしてご活躍の蓬莱さんですが、早稲田大学在学中はタレントとしてテレビ出演されていたそうですね。**

子どもの頃から漠然と、何かモノをつくって表現する人になりたいと思っていたのですが、何がやりたいのか、自分に何がやれるのかはわかっていませんでした。それで可能性を少しでも広げたいと東京の大学を目指し、そこでやりたいことを探すことにしました。

入学後は心のアンテナに引っかかったことはとりあえずやってみようという精神で、バンドをやったり、舞台で役者をやったり、芸能事務所の養成所でレッスンを受けたり、いろんなことに挑戦していました。

せっかく東京に来たのだからテレビの仕事はないかと探すうちに、東京のローカルテレビ局TOKYO MXでスタートした情報番組『5時に夢中!』の男性ユニットに選ばれ、アシスタントやリポーターとして出演することになりました。と言っても、わずか3カ月で交代になりましたけど。

**——その時点で、芸能界とは別の道を探そうとはならなかったのですか。**

大学3年生の時に俳優を目指し始めたばかりで、他のことをやりたいと思わなかったんですよね。「やるからには、その道でプロになる」と本気だったので、就職活動はせず、大学卒業後もアルバイトをしながら俳優を目指す道を選びました。

**——ご両親は反対されませんでしたか。**

父は「30歳になった時には、何でもいいから一人前の仕事に就いていなさい。それまでなら、やりたいことを応援する」と言ってくれました。

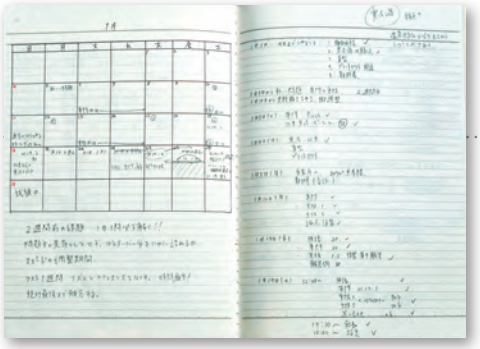
ただ、地方から上京した人間が、「東京で夢を追う」というと、言葉としてはカッコいいけれど、それだけだと人生設計としてあまりにもリスクがあるなと思いました。

叶うかどうかわからない夢に、人生を丸ごと投げ打つのはリスクが高いですよね。リスクを減らすには、やみくもに夢を追いかけるんじゃなくて、作戦が必要だと考え、「人生の作戦ノート」をつくりました。

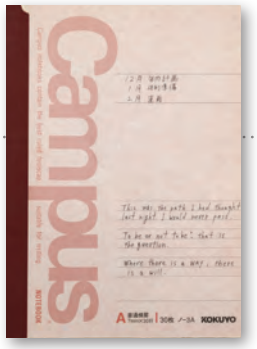
**——ノートにはどんなことを?**

まず、30歳になるまでに一人前の仕事に就くことを長期目標としました。そこから逆算すると、20代後半にはある程度道を決めておかなければならないな。だったら、俳優になるため今年は1年間で3本の舞台に出演するなど目標を決め、さらに逆算して、半年、3カ月、1カ月、1週間の短期目標を設定し、書き込んでいました。

それらを父の前でプレゼンして、1年後に目標をクリアできたら、来年も続けるということをやっていましたね。



気象予報士試験の合格を目指していた頃のページ。1カ月のカレンダーとともに「2週間前の課題　1日1問必ず解く！」「問題文の見落としをせず、10分オーバーをいかに詰めるか」「スピードの調整期間」などの目標と、今日やることが書き込まれている




「人生の作戦ノート」の表紙。「To be or not to be：that is the question」「Where there is a way,there is a will」など英語の言葉も

——「人生の作戦ノート」を書くことで、どんな効果がありましたか。

この方法だと、毎日やることが明確になるから、漠然と過ごさないんですよ。

人生は長いようで短いものです。時間は思っている以上に早く過ぎていきますし、夢を追いかけただけで人生を終えてしまうかもしれません。だからと言って、失敗を恐れて一歩踏み出さなければ、いつか後悔するかもしれない。そうならないように、僕は人生に保険をかけようと考えました。

「人生の作戦ノート」に長期目標や短期目標、今日やることを書き込んでいると、自分は何をしたいのか、どうなりたいのか、その根っこの部分が見えてきます。そこを探っておけば、一つの夢が叶わなかったとしても、絶望することなく、別の夢を見つけられるんじゃないか。長期目標の期限としていた30歳までに俳優になる目途がつかなければ、スパッと軌道修正して違うことをやろうと決めていました。そうやって人生に保険をかけておくことで、本気で夢に向かっていけると考えたのです。

——俳優への道は順調でしたか。

まず、所属していた芸能事務所が倒産するという想定外の出来事に見舞われました。それを機に芸能事務所には所属せず、自分で自分のプロデュースをすることにしました。エキストラ事務所30社くらいに登録して、「できるだけメインの俳優さんと絡める役、少しでもセリフのある役をください」とお願いしていました。そこから這い上がるチャンスがつかめないかと模索したけれど、思うようにいかなかった。

## 人生に保険をかけておくことで、本気で夢に向かっていける

そんな時に声を掛けてくれた芸能事務所に入ったら、今度はマネジメント業務の担当者がいなくなって、プレイングマネージャーをやっていた僕が他の人のマネジメントも任されるようになったんです。その仕事を一生懸命にやっていて、気づいたらがっつりマネージャーになっていました。

——いつの間にか、進んでいる方向が変わっていたわけですね。

もしかしたら、このまま30歳になってもアルバイトをしながら売れない俳優志望をやっているんじゃないか。自分は俳優に向いていないんじゃないか。そんな思いが頭をよぎったのです。その時、心が負けている自分にハッと気づいて「何か別のことを、やらなければいけないな」と。それが25歳の時でした。

——そこから、どうされたのですか。

何をやりたいか見えていなかったので、とりあえず書店に3日間通うことにしました。書店に並んだたくさんの言葉の中で、心に引っかかったことをやろうと考えたのです。資格本のコーナーに行った時、たまたま「気象予報士」という言葉が目に留まって、「そうか。空や自然のことを伝える仕事って、もしかしたらいいかもな」って思ったんですよ。

というのも、小学生の頃は生き物係で、生き物を捕まえては学校に持って行って世話をしたり、友だちに教えることが好きでした。先生にも「蓬莱くんは、生き物のことを伝えるのは上手ね」とほめられたことなどを、人生に迷いまくっている25歳の時、東京の書店でふと思い出したんですよね。自分は自然科学が好きだったな。そっちなら向いているかもしれないと思い、気象予報士の試験に挑戦することにしました。

——とは言っても、気象予報士試験は合格率5％の難関ですよね。

書店でテキストを最初に開いた時、難しい公式が目に入って、一度は閉じたんです。でも、挑戦したい気持ちが湧き上がってきて、その足で子ども向けの本のコーナーへ行き、天気予報の仕組みがマンガで説明されている本や小学生向けのワークブックを買って、そこから勉強を始めました。

——気象予報士試験は、どのように実施されているのでしょう？

年2回実施されていて、学科試験の一般

25歳の時、ノートに描いたイラスト。「感覚を大切に」の言葉が添えられている

知識と専門知識、それに実技試験があります。それぞれ1つずつ受けることができますし、学科試験は合格すれば1年間有効となるので、1つずつ受けて順当にいけば1年半で合格証書を手にできます。

僕は半年に1つずつ合格していこうと目標を定め、試験日から逆算して「人生の作戦ノート」に半年、3カ月、1週間の短期目標と、今日やることを書き込みました。

そこから後は、自分が設定した「今日やること」を淡々と実行していくだけです。作戦を立てる司令塔の自分と、体を動かす自分を分けて考える感じですね。毎日ノートに書いたり、見直したりしながら、試験に向けて着々と勉強を進めていきました。

このやり方の最大のメリットは、やるべきことが具体化されることです。目に見えることで、自分に足りない部分や時間が無いことが実感できて、焦りが出てきます。その焦る気持ちがエネルギーとなって自然と勉強するようになりますし、落ち込んだ時もノートを見返して「自分はこんなにやってこれているんだから、大丈夫！」と自信を持つことができるのです。

**――書き出して見える化することで、いろんな効果があるのですね。気象予報士試験に合格した後、気象キャスターになられるまではどのような道のりだったのですか。**

気象予報士試験の合格者は累計約1万2000名ですが、実際に気象予報士の仕事に就いている人は3000人くらいと言われています。そのうち気象キャスターとなると200人程度で、めちゃくちゃ狭き門なんです。僕が合格した当時、男性が気象キャスターになろうと思えば、気象会社に入って10年はかかると言われていました。

僕は、気象キャスターはお天気おじさんから始まって、お天気お姉さんが続き、近い将来、お天気お兄さんの時代が来るはずと分析し、お天気お兄さんになる計画を立てていました。だから、10年も時間をかけてはいられなかった。

だったら普通のやり方じゃダメだ、他の人がやっていないことをやらなければと考え、当時はまだ珍しかったスマホの動画撮影機能を使って、自撮りで天気予報を始めることにしました。

「1日1回は絶対に自撮りで天気予報をする！」と決めて、気象庁のホームページからプリントした天気図を画用紙に貼り、日付と挿絵を書き入れて、東京の街に飛び出したのです。銀座や渋谷、各テレビ局の前などに行っては、自分が天気予報をする姿をスマホで撮影して、その動画をテレビ関係者に見せて回っていました。

**――その売り込みはうまくいきましたか。**

多くの人は相手にもしてくれませんでした。ですが、中には「面白い」と言ってくれる人もいて、その方の紹介で気象会社で原稿を書くアルバイトに就くことができました。

気象会社に入ってからは、僕がイメージするお天気お兄さんの服装をして、「いつでも出演できますよ」というアピールをしていました。そこで声を掛けていただき、読売テレビの気象キャスターに弟子入りするような形で仕事の仕方や考え方を学ばせていただいて約1年後、気象キャスターとしてカメラの前に立つことができました。

**――お天気お兄さんという夢を叶えられたわけですね。気象キャスターとして、どのように仕事をされているのですか。**

天気予報の大まかな流れは、まず気象庁で大気の状態を観測し、それを基にスーパーコンピューターが複雑で膨大な計算をして予測結果を出します。その予測結果を、それぞれの気象予報士が専門知識と経験で天気予報に変えています。

# 天気は変えられないけれど、情報によって人の行動は変えられるし、備えられる

気象キャスターは気象庁の情報を伝えているだけだから、皆、同じことを言っていると思っている方がいますが、それぞれ微妙に違いがあります。気象庁の予測結果を使っているという点で〝食材〟は同じですけど、調理法や味付けは料理人、つまり気象キャスターによって異なります。プラスαで豆知識を盛り込む人や海外の予報まで入れる人など、それぞれ違うのです。

――蓬莱さんは、どのように料理されているのでしょう？

私は気象解説者でもない、気象伝達者でもない、「お天気の話をする人」くらいの身近な存在でいきたいと思っているんですよね。だから、僕の話を聞いた人が、同じ話を誰かにできるくらいのわかりやすさを一番に心掛けています。天気に詳しくない人にも「よくわかった」と言ってもらえるよう、言葉選びと表現方法を意識しています。

気象キャスターは人の生活、生命に関わる仕事です。天気は変えられないけれど、情報によって人の行動は変えられるし、備えられる。でも、情報を伝えるだけでその意味を理解してもらえなかったら、備えるための行動につながりません。

もう一つ意識していることは、「誰のために仕事をしているか？」ということです。当たり前のことですが、そこを見失わないよう、本番前には視聴者が僕の天気予報をテレビで見ている姿を頭の中にイメージしています。「自分は視聴者のために仕事をしているのだ」と確認するために。

――気象キャスターの仕事で難しいのは、どういうところですか。

最近は、大雨が降れば観測史上1位だったり、夏の暑さも前例のない猛暑だったりします。２０２３年は統計開始以来、最も気温が高かったですからね。予想を上回って災害級の大雨が降ったりすることもあるので、予報は難しいです。この天気図のこの部分をもっと見ていたら、こういう伝え方をしていたら、もっと伝わっていたんじゃないかと、毎回、自問自答しています。

天気予報は自然科学を扱っていて思うようにならないので、満足することがありません。観測は１００％じゃないし、コンピューターも１００％じゃないし、人間の知識や経験も１００％じゃありません。１００％の天気予報は無理で、ある程度のブレ幅が必要です。そのブレ幅もいかにうまく伝えられるか、幅のある中でどこまで役立つ情報に近づけられるかを考え続けています。

――異常気象は、確かに増えていますよね。

私が気象予報士になった15年前は、まだ地球温暖化している、していないという議論がありました。その頃には災害級の大雨や猛暑の頻発化、激甚化が予想されていましたが、現実に起きるようになって、気候変動を疑う人は少なくなったように思いますし、

パンクバンドで
ベースをやっていた20代の頃

気候変動のペースも予想より早く進んでいるように感じます。

――そうなると、自然との付き合い方も難しくなってきますね。

日本には春夏秋冬があり、海も山も川も近く自然に恵まれているけれども、同時に自然の脅威にさらされやすい面もあります。そのような環境で暮らしていくには、自然に対して時には近づいたり、時には離れたりといった距離感がすごく大切なんじゃないかと思います。天気予報で危険情報が出されていれば、海、山、川から離れる。悪天候の中で無理をしない。科学が発達した今だからこそ、改めて自然への謙虚な姿勢が求められているのかもしれません。

――蓬莱さんは、防災士の資格もお持ちだそうですが…。

気象予報士の勉強を始めた時、「気象の世界一本でやっていくんだ。人の命や生活に関わる仕事だし、本気でやらなければ」と思って、防災士の資格も取りました。

防災士の勉強をしてよかったのは、災害に関する情報の伝え方や地震について学べたことです。最近は、地震と水害の両方に対してどう備えればいいか、防災士の観点からお話をお聞かせくださいといった講演の依頼も増えています。

講演に呼んでいただいた時は、その地域のことを事前に調べて話に盛り込むようにしています。そうすると、知識だけじゃなくて経験になるんです。テレビで各地の天気予報を話す時も、そこで出会った人たちの顔や情景を思い浮かべることで、伝わりやすくなるような気がします。

## 長く続けられてきたことが、結果として自分に向いていたことだった

――日々、試行錯誤されているのですね。

気象キャスターになって今年で14年目ですが、未だに迷いますし、悩みます。10年経った時、ようやくスタートラインに立てた気がしました。10年続けられているということは、自分に向いているかもしれないと思えました。20代の頃は自分に向いていることをずっと探していましたが、そうじゃないなと。長く続けられてきたことが、結果として自分に向いていたことだったのだと気づいたのです。

気象キャスターとして、毎回、もっとこう伝えればよかった、あれをしておけばよかったと反省したり、後悔することがありますし、うまくできたと思うことのほうが少ないです。まだまだ道半ばで、もっと勉強したいし、いろんなアイデアを持っているのでどんどん取り入れていきたい。

天気予報に関するテクノロジーや考え方も進化しているので、自分自身もアップデートさせながら新しい天気予報の在り方を模索しているところです。「まだまだやりたいことや勉強したいことが、たくさんある」。そう思える仕事に出会えて本当によかったと、今、心から思います。

――紆余曲折を経てたどり着いた道ですね。

20代の頃は、バンドをやっても、役者をやっても誰にも認められませんでした。自分は何者なのかもわからないような期間が長かったこともあって、今、自分にポジションを与えられていることが有難い。社会の中で与えられたポジションがあるのであれば、そこで全力でやるべきだと思いますし、そのことで誰かが喜んでくれるのであれば、一生懸命やるべきじゃないかと思います。

僕は気象キャスターとして毎日カメラの前に立ちますが、ルーティンで仕事をしないように心掛けています。「明日の天気は、明日しかない。誰かにとって大切な日」と心を込めて天気の話をする。同時に、空がなぜ青いのか、雲が何でできているのかを初めて知ってワクワクした気持ち、勉強を始めた時の感動を忘れないようにしながら、これからも視聴者の皆さんにお天気の話を届けていきたいと思っています。

――これからも進化し続ける蓬莱さんの姿を楽しみにしています。本日はお話しいただき、ありがとうございました。

（インタビュアー／ライター　更田 沙良）